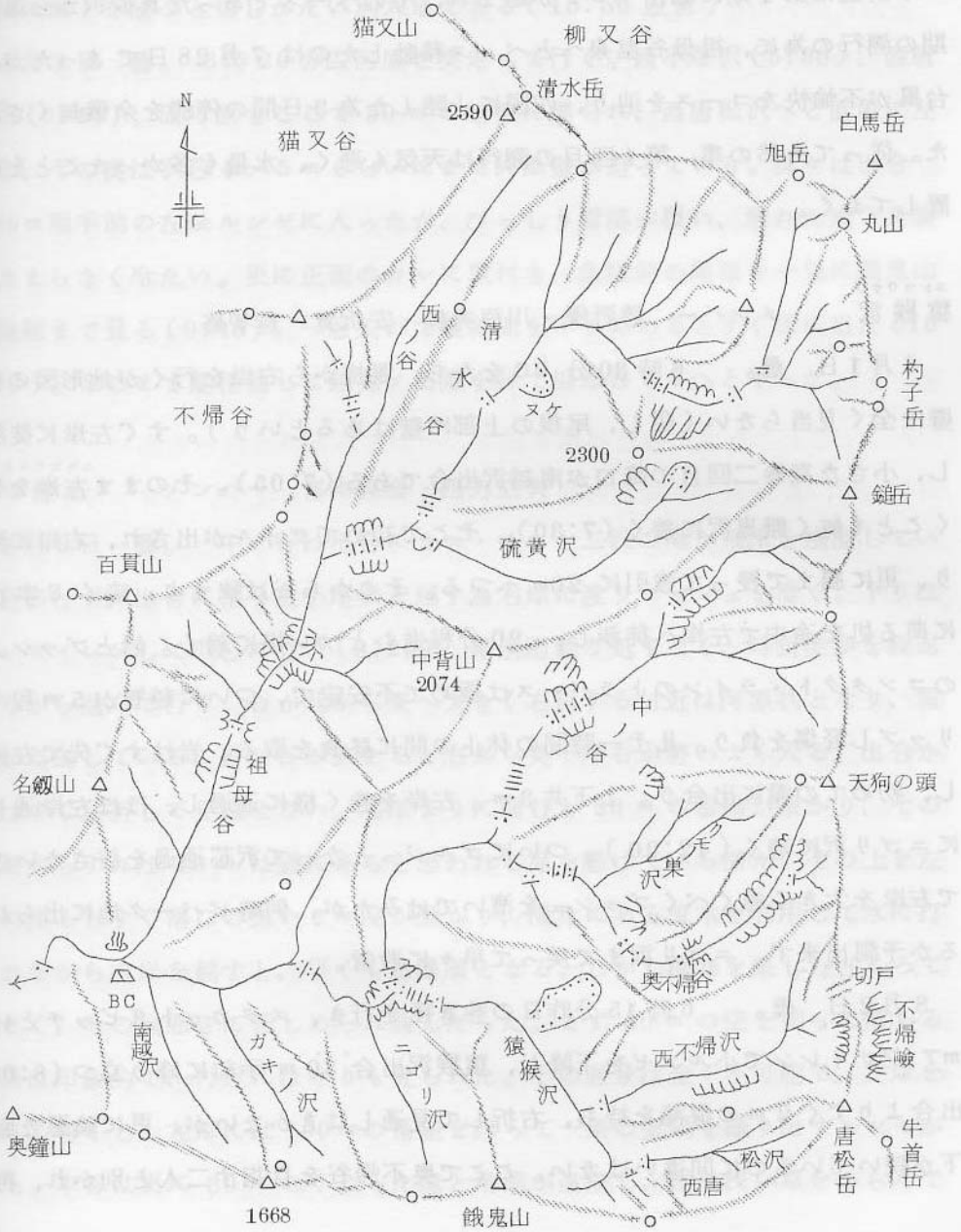
3. 黒部祖母谷（1968年8月）

四方立夫

黒部の谷に活動の地を求めようとする者にとって、その「ライセンス」ともいうべき、「上ノ廊下溯行」が既に済されているという意義は大きく、更に69



年夏以後、それが二度と発行されなくなり一層価値あるものとなった。

「上ノ廊下」以後、黒部に於けるアクティブ・フィールドが次第に北上して行ったのは、ある程度当然の成り行きとも思える。そして今回、黒部三大支流の一つである祖母谷全支谷溯行計画が立てられ、完遂した快挙は岳人(266号)、及び 踏査(6号)に記載されている。

本計画は第Ⅰ期に劔岳 RCT が組まれ、そのベースであった真砂沢から第Ⅱ期の溯行の為に、祖母谷温泉へとベース移動したのは 7月28日であったが、台風が不愉快なコースを辿り、四国に上陸した為3日間の停滞を余儀無くされた。従って当然の事、第1回目の溯行は天気も悪く、水量も多かったことを前置しておく。

猿猴沢(エンコウサワ)　　メンバー　勝野優・川戸秀起・安沢寛・越智修

8月1日　曇。　6時30分 BC をたち、堰提から右岸を行くが地形図の岩壁は全く見当らない(但し、尾根の上部に壁はあるという)。すぐ左岸に徒渉し、小さな高巻二回目の降口が南越沢出合である(7:05)。そのまま左岸を巻くことも無く餓鬼沢に着く(7:30)。そこで初めてザイルが出され、右岸に渡り、更に腰まで浸って強引に 20m へつる。そこから谷は狭まり、暗くS字状に曲る処を途中で左岸へ徒渉し、 20分程進むとガレ場に着く。岩とブッシュのコンタクト・ラインのトラバースは極めて不安定で、ついに越智が5m程スリップし軽傷を負う。凡そ一時間の休止の間に昼食を取る。岩はすぐ先で左折し、初めての滝に出合う。上下共3m。左岸を巻く様に通過し、ほぼ左岸通しにニゴリ沢に着く(12:20)。ついにゴルジュとなって沢芯通過を許さないので左岸を大きく巻くべくブッシュを漕いではみたが、何時ビバーク地に出られるか予測出来ず、ニゴリ沢まで戻って早々に設営。

8月2日　曇。　6時15分昨日の巻き径を行き、スタカット3ピッチと40mアップザイレンで小ルンゼを下降し、猿猴沢出合 30m 手前に降り立つ(8:00)。出合よりすぐ2mの滑滝を持ち、右折して見通しはきかないが、更に険悪な廊下が続いているのに間違いはない。ここで奥不帰谷を目指す二人と別かれ、再

び巻き始める。出合に落ちる小尾根を越し、左下に短い滝が5～6段連続しているのを確認しながら巻き続け、壁の切れ目を懸垂で下る（12:45）。廊下は巻き切ったらしく、左折すると磈磊化した河原に一変し、暫く進むと巨岩で出来た二段15m滝に出合い、右岸を巻く（15:05）。やがて河原の磊石は小石と砂に化し、沢幅も100～200mに拡がる〝カモシカの広河原〟に出た。すぐ下流の廊下を思うと信じがたい別天地である（15:50設営）

8月3日　曇。6時20分広河原を突走って行く。西不帰沢（6:30）、西唐松沢（6:45）。広河原もここで50mの峭壁に遮られ、西唐松沢へと直角に左折し、その奥は沢芯4～5mぐらいにまで両岸壁が迫っている。我々は出合100m程手前の左岸ルンゼに入ったが、びっしり雪渓が覆い、濡れた地下足袋がたまらなく冷たい。更に正面のガレに取付き、急傾斜の尾根を一気に餓鬼山の稜線まで登る（9:45）。一服入れて緩斜面を下り始めるとすぐ径に出た（10:00）。そのまま夏径通しに餓鬼ノ田圃を経て祖母谷BCへと下った。

奥不帰谷（オクカエラズダニ）　メンバー　宮本義海・四方立夫

8月2日　曇。中ノ谷は出合に2m・4mと二段の滝が飛沫を横溢していて近づけず、出合に落ちる小尾根を越す為右岸に渡りブッシュを漕ぐ。下りはアンザイレンして沢芯に立つ（9:20）。格別困難な処もなく、時折徒渉を繰返しながら進んで行く。谷が北から東へ大きく右折する付近は河原状となり、雪渓が点在している。再び谷が狭まると右から奥不帰谷が勢いよく入る。出合からはすぐ左折して見通せない。右岸よりに進むと20mの雪橋が架かり、その傾斜からすれば10mは猶にあると思われる滝を懸けている様だ。その上を左岸に渡るとすぐ落口の狭い2m滝が懸かり、滝身にある流木を利用して水に打たれながら右岸を越すと、早くも造瀑層となる。しかし瀑布を楽しむどころではなく、その険悪さに苦しめられ通しだった。まず30mの空を切って落ちる美瀑は印象的で、付近にはせりも見られた。その直登は全く不可能で、左岸を小さく巻くと、左岸には100mの落差を誇って一条の壁縞を織り出すルンゼが入る。本谷は更に30mのくねった滝と滑滝が連続し、根の浅い草をからんで

左岸を高巻き、 35 m懸垂で落口に立つ。胸の鼓動をおさえながら昼食を取る(13:00～13:30)。次の 40 m滑滝も直登不可能、今度は右岸を巻き 40 m懸垂で沢芯に戻る。どうやら第一造瀑帯は終ったらしい。土と枯葉で汚れた雪渓が続く。濡れた地下足袋を通して感じる雪渓の冷たさは寧ろ快よい。それ程疲れていた。

正面に白い岩壁を望む頃、左手に蜘蛛ノ巣沢が入る。本当に蜘蛛巣の様にルンゼが複雑に走っている。少し進んでから、左岸の小さな棚に二人分のブラッツを作り、ツェルトを被る(15:45)。炊事中に雨が沛然と降って来たが通り雨で助かった。

8月3日　曇。　七時出発。すぐ雪渓は切れ 20 m瀑布から右岸草付きを巻く。その落口から100m程雪渓が続くと、末端には再び 20 m程の滝が懸かり、左折する為その先の詳細な様子は分からないが、悪場が更に続いている事は判る。そこで右岸小ルンゼを詰め、小尾根を越えようとして登って行った。すぐ切れると思われた右の壁は執拗に続き、やがて昨日見た白い岩壁の末端が左に張り出し、最上部でやっと右壁は 60 度傾斜のザクと化し、スタカット5ピッチでブッシュ帯に逃げ込んだ。下降は最後 40 m アブザイレンで沢芯に立つ。間も無く再び雪渓となり、 20分程進むと正面に本谷を思わす様な豁然としたルンゼが左岸に入り、本谷は雪渓の下に 10 m程の滝を落として 90度左折し、更に廊下となって続き、右折している為先が望めず、前記のルンゼに戻って昼にした。昼食後、ルンゼの雪渓を凡そ 50 m登ってから左のガレを詰めて小尾根を越し、沢芯に立ったのは出発して7時間後の13時15分。朝から僅かに1Km程しか進んでいない。しかし、難難として我々の溯行を妨げ続けて来たこの奥不帰谷の厳しさも、ようやく息をつき、その後は雪橋とゴーロが交互に続き、時には伏流するようになったかと思うと、ついに最後の長い長い雪渓が始まった。ガスにつつまれ、カモシカやニッコウスゲの群生に見守られ、廊下の中を黙々と歩いて行くと、次第に滝の音が近づき、やっと二股に着いた時(14:10)一瞬にしてガスは晴れ、右俣入口は雪渓から上だけで 50 m の滝が階段状となって落ちている。その瀑布の直登は溯行最後の喜びを与えてくれるかの如く、

全く快適なフリークライムを楽しんだ。続いて5 mの滑滝が三つ続くが、いづれもフリークライムで快適に越すと、いよいよツメとなり、水は伏流し、這松のなだらかなスロープの向うには国境稜線が見え、最後の縦走者が黒い点となって、唐松岳へと姿を消して行った（15:05）。眩耀の雪田とお花畑の中にツェルトをはったが、溯行を終えた満足感が強すぎるのか、なかなかツェルトにはもぐる気がしなかった。

8月4日　晴。　朝ツェルトから顔を出すと、正面には劔岳が手に取る様に見える。八ツ峰・チンネ・ジャン・ニードル……

7時、素晴らしいビバークサイトを後に、可憐な花を踏むまいとして、右に左に向きを変えつつ20分で稜線に出た。張詰めていた緊張感が急に弛んだ為か、それとも今日に限って晴てくれなくてもいい灼熱の太陽のせいか、BCまでの道程はいやに長かった。

清水谷（シヨウズダン）　メンバー　杉本健二（O・B）・藤原聰

8月2日　曇。　杉本氏の入山の都合で皆より一日遅れて7時半出発。祖母谷側に入り、白馬岳への登山道を30分程進んでからルンゼを下って本谷に入る。最初右岸を進み徒渉を繰返すこと六回で廊下に出交すが、奔流する沢芯は行けず、右岸を巻きつつ進む。途中で60 mの滝となって本谷に落ちるルンゼに出た。そのルンゼ自体の下降は可能なのだが、本流はなおも廊下が続いているので、更に藪を漕いでから懸垂で沢芯にやっと戻った（12:00）。少し進んでから昼を取る。その後やっと廊下は終ったが、30分も進むとゴルジュに4 m滝が詰っており、その右岸に空荷で取付き、ザックの吊上げをして突破し、懸垂で沢底に立つと、再び河原状となって距離を稼ぐ事が出来る。右岸に入る支流をすぎた処でビバーク（15:30）。

8月3日曇。　7時半に出発したが、すぐに廊下に行く手を阻まれ右岸の高巻に入る。初め獣径を進んで行くと、突然熊に出合い双方共ビックリして互いに背を向けパッと逃げる。

対岸には中背山に端を発する支流が、本流と合するのが望めるが、深く浸触

相摩された廊下がなおも続き、その溯行は不可能かと思われる。結局、我々は不帰岳ー百貫山の最低コルから落ちるルンゼまで藪漕ぎを続け、そのルンゼにルートを求めて沢芯に降りる。それより先は別段困難な処も無く、西ノ谷の出合に達して荷を置いた（13:15）。終始藪漕ぎという大変な一日だった。

8月4日　晴。　7時35分出発。いよいよ清水谷に入るのだが、すぐ小さな廊下に滝が三つ連続して居り、右岸を巻いて硫黄沢出合に着く（9:35）。そこからは河原状になり、快調に進んで行くと1380 mの右折点には、大きなチョックストーンを持った滝が懸かり、右岸を巻いて通過する。谷が南西から東へと大きく弧を描く少し手前（1500 m付近）の左岸には、幅約400mにも及ぶ〝山出し〟が出来て居り、今シーズン出来たものと思われるが、そのスケールには驚いた（12:40）。1時半、地図に記入されている滝（40 m）に達し、左岸を巻き出したが、瀑布は三つ連続し、更に滝の左岸側壁は高差300m程にまで発達している為、簡単に巻き切れると思ったこの高巻も、壁の縁に沿ってとうとう無名のピーク（2300m）まで追い上げられた。（この赤茶けた壁は旭岳附近からよく見えるが、もろそうなので登攀の対象とはならないと思う。又、同様の壁や名峰があちこちに見られ、清水谷の厳しさを物語っている。）その無名ピークを越え、コルまで下ってからルンゼを下降し、やっと本谷の雪渓上に立った（18:00）。30分程進んでビバーク。

8月5日　晴。　廊下の中を進む。途中の滝は問題なく直登出来、河原状になると硫黄の臭気が鼻をさす。雪渓があり、その先端には7～8 mの滝が落ちているが、右岸のガレを通過すると、再び河原状になり凡そ30分で二股に着く。左俣には30 m滝が懸かっているので左俣を詰めて行くと、いよいよ水量も減ってガレ場から這松帯にと変わり、14時すぎ、ついに白馬鎚の稜線に抜けた。残念ながら今日中に下山せねばならず、皆の居るＢＣへ戻る事が出来ないまま、鎚温泉から猿倉へと夏径を下って行った。

中ノ谷（ナカタン）・硫黄沢（イオウサワ）・西ノ谷（ニシタン）　メンバー　勝野優・川戸秀起・四方立夫

8月5日　曇。　ＢＣを6時40分出発。ニゴリ沢出合（9:55）。猿猴沢出

合(10·50)。奥不帰谷出合(14:10)。ここまで一回目と同じルートを取って来る。そこで左岸に徒渉して進むと、正面約2Km先におむすび状の岩峰〝おむすび岩〟が望める。3m二条の滝は右が階段状で問題ないが、中ノ谷最初の一条の滝(2m,14:55)は、落口から先が悪そうなので右岸ルンゼから高巻くと、下には全体の落差40m程となって五段の滑滝が連続しているのが見える。20m懸垂で雪渓上に降り、少し戻って幕営(16:00)。

8月6日　曇。　一晩水につけてあったワラジを履いて6時45分出発。昨日降り立った雪渓の先端から右岸草付を巻いて、次の雪渓まで進み左岸に渡ったが、僅かに200m進むのに三時間も費してしまった。続いて10m先の雪橋は各所に亀裂が入っており、コンティニアスで右岸に渡る。そのラントクルフトは下れず、草付をトラバースして小さなバンドに出、ハーケンを支点にオーバーハングを5m懸垂で下ると、そこは造瀑布を一歩入った処だった。(1600~1700m付近)。まず雪渓の下に10m滑滝を落とした後、10m滑滝、10m(落口に残置ハーケン有り)、5m、5m、2m、5m二条、15m S字状階段の滝と連続していて、何れも右岸を直登して来るが、まだ廊下は続く。左壁からは〝おむすび岩〟右方ルンゼが二本入ると、ようやくニッコウキスゲが手に届く処に咲くようになり、やっとザイルを解いて昼食。30分で二股に着いた(12:55)。そこは剱沢二股よりもまだ広く感じられ、右俣は広い沢底いっぱいに雪渓が詰って東進し、左俣は雪渓こそ続くが傾斜もあり、左岸は30~50m壁で、全く陽を受けずに北進している。その陰鬱な左俣に入り、500m程進んで荷を置いた。そこから雪渓は急な傾斜を増して右折し、すぐ左折すると、右岸も壁となって完全な廊下を形成している。これら三つの要素は、二つ以上の瀑布を懸けている事を如実に物語っている。

8月7日　曇。　6時半に目を覚まし急いで朝食に取りかかったが、それでも7時5分には出発した。右岸ブッシュを直上して硫黄沢に向かう。尾根上2150mの小ピークに立つと、女性的な容姿で清水岳・不帰岳が眼前に迫り、硫黄沢と清水谷を分かつ尾根は対称的に赤茶けたガレで荒々しい。戦後まで鎚岳ー中背山ー祖母谷温泉を繋ぐ径があったと聞くが、やはりその痕跡さえ認め

られないまま比較的緩斜面を硫黄沢へ。降り立った処は 1770 m付近で、優美な姿の毛勝三山がよく見える。我々は一番いい処を下降して来たらしく、上流も下流も左岸はひどいガレで、とても下れそうになかった。昨夜雪渓上で寝た為か四方が体の不調を訴え、食糧もまだ4日分有り、ゆっくりとした行動となって 9時 40 分下降開始。両岸とも酷いガレでどこを歩けばいいのか分らない程だ。途中 3 ～ 5 m の滝が幾つかあるが、水量も少なく問題なく通過出来る。狭い砂地にカモシカの足跡と一輪の石楠花を見る。1500 m 付近よりやっとガレから解放されるが、清水谷出合 300 m手前から今度は硫黄の悪臭に悩まされる様になり、奇怪な色、形の岩が目に留まる。出合 60 m程手前に 5 m滝があり左岸を小さく巻くと、幅 20 m の山出しがあって、清水谷に着く（12:05）。まだ早いが大事をとっておかんとする。

8月8日　小雨後晴。　今夏計画した沢の総てがこの日で終えると思うと意気揚がり、三人元気に 7時出発。 15分も下ると小さな廊下になり、牛歩して行く。3 m滝は左岸を懸垂で下ってすぐ右岸に飛び移り、続く 5 m滝は右岸ブッシュを巻きかけたがもう一段滝が懸かっているので、そのまま尾根を越えて西ノ谷に入る。出合より僅に 20 m 入った処に降りた（ 10:15 ）。傾斜はまあまあだが滝らしきものは全く無い。背に当る陽差しは強く、絶えず水際を歩いた。『 溯行は、こうでなければ、 』　不帰岳へ直上する支谷の出合で昼にした（ 11:30 ）。滝のない本谷には見切をつけてその支谷に入る事にする。意外にも赤沢岳西稜猫ノ耳がかすんで望めたのは印象的だった。 12時支谷に入ると水量こそ急減するが、 5分後には小さな廊下となり、 5 m・3 m・4 m・1 m の滑滝と 8 m滝があり、何れも左岸よりをシャワークライムで楽しむ。その先にはまだ雪渓が残っており二股まで続く。左俣はスラブ上を 20 m の滝となって落ちているので、右俣のガレを行くも岩ナダレの危険性があり、右のブッシュ帯に入って最後のアルバイトをする。 15時5分やっと径に飛び出し、 1分で不帰避難小屋に着いた。

その夜、小屋の前に張られた小さなテントの中から、充実感が安らかな寝息となって聞こえていた。